様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５７８０３３３

研究課題名（和文）家族と地域の協働による乳幼児のウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究

研究課題名（英文）Fundamental research for realizing well-being of infants by collaboration between family and community

研究代表者
木村　直子（Kimura, Naoko）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：８０４４８３４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、乳幼児期の子どものウェルビーイングを家庭と地域の協働の中で実現するために、乳幼児の育ちに関する目標や理念を整理することにあった。研究の成果は、以下の三点である。第一に保護者や地域の様々な環境で共有できる乳幼児期の育ちに関する「子どものウェルビーイング尺度（乳幼児版）」を作成した。第二に作成した指標を用いて、「子どもの育ちと家庭生活に関する調査」を実施し、乳幼児期の子どもの育ちにおいて課題となる家庭生活を明らかにした。第三に、調査結果を踏まえ、家族と地域の協働による乳幼児のウェルビーイング実現のための新しい家族支援のモデル「親なびワークショップ」を完成させた。

研究成果の概要（英文）：To implement well-being of children in their infancy within familial and local collaboration this study organized the goals and ideas regarding the nurture of infants. The results of the study give the following 3 points: First we made the “Well-being scale of Children (Infant edition)” which deals with the nurture of infants and can be shared by parents or guardians in varied local environments. Second, using the previously made scale we implemented the “Assessment of family lifestyle and nurture of children” which clarifies the task of family lifestyle for nurturing children in their infancy. Third, based on the assessment results, we completed the “Parent navigation workshop”, a new family support model for implementing the well-being of infants through familial and local collaboration.

研究分野：社会科学

キーワード：子どものウェルビーイング　乳幼児　家族と地域の協働　乳幼児のウェルビーイング　子どもの健康　家庭生活　家庭教育　子どものウェルビーイング尺度（乳幼児版）

１．研究開始当初の背景

（１）経済協力開発機構（OECD）は、乳幼児期の教育とケア（ECEC）政策に関する調査結果を『Starting Strong Ⅰ』（2001）『Starting Strong Ⅱ』(2006)『Starting StrongⅢ』（2012）として公表している。最新の OECD の報告書『Starting StrongⅢ』（2012）では、乳幼児期の養育・保育・教育の質こそが、子どもの発達に好影響をもたらすだけでなく、社会の長期的な生産性が向上し、社会全体の雇用と就職能力（エンプロイヤビリティ）を促進し、格差を是正すると示唆されており、各国政府は子どもの学習と発達を向上させるために幼児教育・保育の質に関する基準と目標を確立すべきであると明言されている。

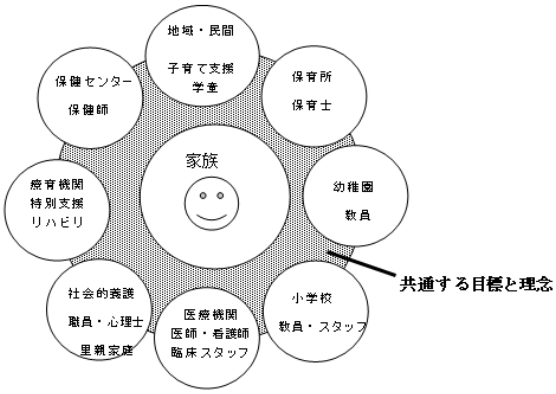
（２）これまでのわが国における保育・教育・養護の理念・目標は、保育所・幼稚園・児童養護施設等、各フィールド内でカリキュラムや基準が設計され、実施されてきた。したがって、子どもとその家族にとって、保育・教育・養護は、提供される資源・サービスとして認識されることが多く、家庭における養育とは一線を画して考えられてきた。そこで、子どもとその家族が生活する環境すべてに共有できる育ちに関する目標と理念の枠組みを作成することによって、家庭や地域社会は同じ目標の達成に取り組む真の「パートナー」となることができると考えた。

（３）平成 20－24 年度まで、母子保健法によって定められている乳幼児健康診査をフィールドに、自閉症スペクトラムを含む発達障害の子どもたちの行動特性やスクリーニング法に関する研究を行ってきた（『チームアプローチのための乳幼児期の自閉症スペクトラム行動特性に関する基礎的研究』）。乳幼児健康診査を研究の中心的フィールドとしたこともあり、現代社会の中に暮らす子どもとその保護者を 3000 組近く観察調査した。その結果、発達障害や精神遅滞など医学的に診断されるハンディキャップを抱えている子どもたち以外にも、年齢相応に社会性やコミュニケーション能力が育っていない、養育者との愛着形成が十分構築されていない、経験不足からくる身辺自立の遅れが見られるなど、社会生活を営む上で何がしかのハンディキャップを抱えている子どもたちが多く、特定の子どものみならず、全ての子どもへの子育て支援としての保育・教育・養育指導の必要性を強く感じた。

（４）ウェルビーイング（well-being）は、WHO の健康の定義（1946）が語源であり、1970 年の OECD の報告書『Subjective Elements of Well-Being and Measuring Social Well-Being』が公表され、生活の質（QOL）としてのウェルビーイング（Well-Being）が指向されるようになった。子どもの「ウェルビーイング」については、1989 年の国連子どもの権利に関する条約（Convention on the Right of the Child）を始め、1994 年には国連国際家族年のキーワードとして重要視された。一方わが国においては、長年定着しない概念であったが、近年、福祉領域・保育、教育学領域、心理学領域において少しずつ広がりをみせている。筆者も平成 13－19 年度まで、「子どものウェルビーイング」に関する研究に関わり、中学生のウェルビーイングの程度を測定する尺度を作成し、家庭、里親家庭、児童養護施設における子どもたちのウェルビーイングの規定要因を検討した。わが国の研究を概観すると、乳幼児期の子どもを研究対象としたものは相対的に少なく、乳幼児期の子どものウェルビーイングを保証する環境を整備するためにも、総合的な育ちの目標及び理念の設定は急務である。

２．研究の目的

（１）乳幼児期の子どものウェルビーイングを実現することを目的に、家庭や地域社会が真の「パートナー」となって取り組むためには、乳幼児期の子どもの育ちに関する目標や理念を共有する必要がある。具体的には、保護者や家族成員と地域の保育・教育・福祉現場の専門職（保育士・幼稚園教諭・保健師・施設保育士・子育て支援センタースタッフ）、さらに国民全体が、乳幼児期の子どもの育ちに関する共通認識・共通理解を持ち、一丸となって、適切な養育・保育・教育・養護等支援をできる基盤を構築していく必要がある。



（２）本研究では、乳幼児期の子どもの育ちを支える環境すべてに共有できる、育ちに関する目標や理念を整理することを目的とする。

３．研究の方法

（１）乳幼児の育ちに関する指標の整理

日常生活における子どもの育ちに関する情報源、行動特性や関わりの難しい生活場面、支援への希望などを調査した。また家庭で育つ子どもの発達や行動についての観察調査を実施した。これらのヒアリング調査及び実態調査に加え、乳幼児の育ちに関する国内外の先行研究から、乳幼児の育ちに関する指標の項目を整理した。

（２）尺度化のための調査実施

（1）によって整理した乳幼児の育ちに関する指標を「子どものウェルビーイング尺度（乳幼児版）」として信頼性や妥当性のある尺度とするために、保育所・幼稚園へのアンケート調査を実施した。調査対象者は、A 県下の 1 私立保育園児 110 人、2 公立幼稚園年少(4 歳児)102 人、年長（5 歳児）160 人、B 市 B 中学校区の全保育園 2、3 歳児 255 人、全幼稚園年少(4 歳児)197 人、合計 824 人であった。2016 年 9 月から 10 月に各園施設における留め置き調査法によって実施した。

（3）乳幼児のウェルビーイングと家庭生活に関する調査

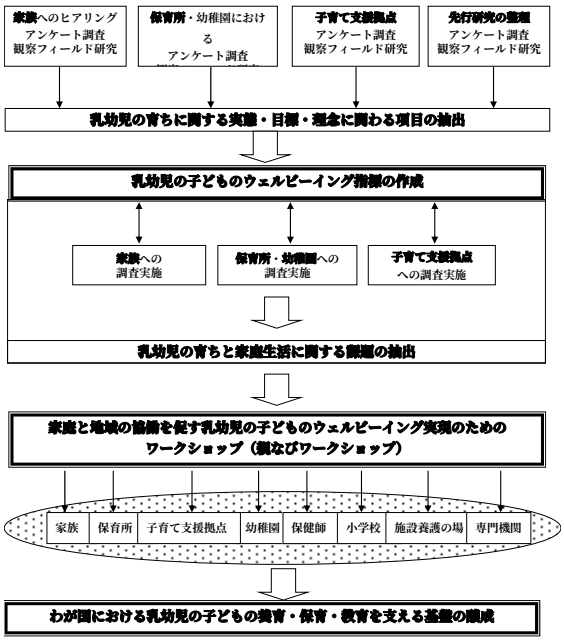
さらに「子どものウェルビーイング尺度（乳幼児版）」を使用し、乳幼児のウェルビーイングと家庭生活に関するアンケート調査を実施した。調査対象者は、A 県下の 1 私立保育園児 110 人、A 町内全公立幼稚園・認定こども園(5 園)(4 歳児及び 5 歳児)538 人、B 市 B 中学校区の全保育園 2、3 歳児 255 人、全幼稚園年少(4 歳児)197 人、合計 1100 人であった。調査実施は、2016 年 9 月から 10 月及び 2017 年 7 月から 8 月の二度にわけて実施した。

（4）家族と地域の協働のためのフィードバック

（1）～（3）の方法で実施した研究の成果を踏まえ、家族と地域が協働し、乳幼児の育ちを支えることができる基盤構築に向けたフィードバックの在り方を検討した。

4．研究成果

研究期間全体を通じて実施した研究の成果は、以下の図のように整理することができる。



（1）乳幼児の育ちに関する調査

第一に保護者や地域のあらゆる環境で共有できる乳幼児期の育ちに関する一つの指標「子どものウェルビーイング尺度（乳幼児版）」は、1000 名以上のサンプルによって信頼性のある尺度として完成することができた。

第二に、作成した指標を用いて、乳幼児期の子どもを育てる家族に対して「子どもの育ちと家庭生活に関する調査」を実施した。その結果、乳幼児期の子どもの育ちにおいて課題となる家庭生活は、次の通りである。①寝る時間が遅く、テレビ等視聴や電子機器（スマホ・ゲームなど）使用時間が長い。②保護者は規則正しい生活やテレビ・ゲーム時間を短くすることの重要性は分かっているが、実行できていない。家庭におけるルールが決められていない。③子どもたちは、朝食が食べたくない、夜よく眠れない、日中ごろごろしたり、病気になりやすいなど生活習慣の乱れの影響が身体面の不定愁訴として見られる。また怒りっぽく気分のむらがある。④「粘り強く取り組む力」や「新しいことに挑戦する力」「自分の気持ちを言葉で表現する力」に課題があると、保育園・幼稚園の保護者は感じている。また、子どもの育ちと家庭生活に関する調査については、同じ時期に本研究の対象と同じ A 県 A 町と B 市 B 中学校区内全小学 2 年生、5 年生、中学生にも行っている。その結果、前述の①～③の傾向は、保育園児・幼稚園児・小学生・中学生に共通しており、その傾向は学齢が上がるとともに拡大し、深刻な方向へと進んでいることが明らかになった。どの学齢期においても、家庭生活とりわけ生活習慣に関する支援が喫緊に必要な状況である。併せて、保護者は子どもの育ちにとって望ましい家庭生活のあり方を知識として持っているが、実行できていない現状があることも明らかになった。つまり、望ましい家庭生活のあり方を、頭では理解しているが、実行できない。分かっているけれど変えられない事情や、変えるきっかけがない状況にあるといえる。そして、このような現状の打開こそが、子どものウェルビーイングを実現する上で重要であると考える。そのためには、望ましい家庭生活のあり方に関する調査結果の報告や啓発だけでなく、自分の家庭生活を見直す機会や自分の家庭生活に取り入れられる実際的な工夫や改善策を知る機会が必要であると考えた。

（2）家族の養育主体性を尊重するワークショップ

第三に、第二の子どものウェルビーイングに関する調査結果及び調査結果からの考察を踏まえ、家族と地域の協働による乳幼児のウェルビーイング実現のための基盤形成として、新しい家族支援のモデル「親なびワークショップ」を完成させた。ワークショップの概要は以下のとおりである。

家族と地域の協働による子どものウェル

ビーイングの実現のためには、それぞれの家庭の主体性を尊重しつつ、同じ子育て期の保護者同士が交流し、家庭生活における具体的な工夫や家族のルール作り等をするワークショップを構成することとした。またワークショップが、子どものウェルビーイングを実現する家族のあり方を考える積極的な機会となるために、以下のことに留意し構成した。
・保護者同士が交流し、家庭生活における具体的な工夫や家族のルール作り等を、気さくに話し合える場とすること。
・家庭の養育主体性を尊重するため、各家庭における様々な子育てのあり方やエピソードが、否定されることなく、尊重されること。
・ワークショップへの参加が、保護者同士のつながりを形成するきっかけとなり、保護者同士のつながりが学校園や保育所、児童館等から波及し、地域の教育力の基盤となること。地域との協働性を主体的に作り出していけること。これらの留意点を踏まえ、保護者参加型ワークショップを体系化し、ワークショップを展開するためのプログラム集を作成した。

プログラム集を活用したワークショップは 2017 年及び 2018 年に A 県下の幼稚園、保育所、児童館、子育て支援センター等、27 か所、977 名の保護者が参加した。ワークショップ実施後の評価アンケートでは、977 名の参加者の 99%が、「ワークショップは楽しく、有意義なものだった」と評価している。また 96%の参加者が「今後の子育てや家庭生活に活かせそうである」と回答し、89%の参加者が「機会があればまた参加したい」と回答した。

保護者参加型ワークショップは、子育てや家庭生活のあり方を振り返るだけでなく、参加している他の家庭における子育て事情や家庭生活の工夫を知ることができる。どの保護者も家庭生活の中で子どものウェルビーイングを実現したいと願っている。しかし、実際の家庭生活では子どもの要求や思いをわかっていても、なかなか優先できない場面もある。特に共働き家庭やひとり親家庭が増加している昨今では、どの家族も限られた時間の中で生活を切り盛りしている。子育ては、子どもをウェルビーイングに育むことであるが、忙しいライフスタイルの中で、子どものウェルビーイングと実際の家族生活を上手に折り合わせるには、工夫がいる。例えば、子どもの帰宅時に学校での出来事や話をゆっくり聞いてやりたいと保護者が思っていても、親の就労や子どもの課外活動等で、子どもの帰宅時と親の帰宅時が同時間になるライフスタイルの場合、保護者は帰宅後すぐに夕食の準備などをしなければならず、家事をしながら片手間に子どもの話を聞くことになる。夕食の準備など急いでいる時に、子どもが話かけてくると、「今忙しいから後にして」と言ってしまう。後から時間ができた時には、子どもは話したい内容を忘れてしまったり、話したい気持ちではなくなっていたりして、結局話を聞いてやれなかったということがある。このような場面は共働き家庭やひとり親家庭のみならず、どのような家庭でも思い当たることである。こんなときどうすれば良いのか、子どもにどんな声をかければ良いのか、この問に正しい答えはない。このような内容をワークショップのテーマとして、保護者同士が話し合うことで、自分の家庭でのやり方を振り返ったり、別のやり方を知ったりすることができる。例えば、「今忙しいから後にして」ではなく、「いつでも 5 分間と時間を区切って、子どもの話を先に話を聞くようにしている」、「子どもに家事を手伝ってもらいながら話を聞く」、「帰宅後、20 分間は子どもとの時間と決めて、家事をしないことにしている」、「あとで、という言葉は使わず、5 分後に話聞くから、ここでお茶を飲んでちょっと待っていてね」など様々な工夫を知る。実際に別の家庭で実践している工夫を聞くことで、自分の家庭でも取り入れられるものが見つかるかもしれない。新しい工夫によって、子どもの話を聞くことができるようになれば、それは子どものウェルビーイングを増進させたことになる。保護者同士が一つの子育てテーマで話し合い、具体的な工夫を数多く知ること自体が、子どものウェルビーイングを保障する家庭生活の可能性を開くといえる。

また保護者参加型ワークショップを通して、あるべき家族役割を学ぶのではなく、自分の家族のあり方を見つめることで、保護者自身が自分の家族の独自性に気付き、主体としての家族を育む一歩になると考える。さらに、同じ時代に子育てをする同志としての仲間意識を体感することは、「今ここで」誰かと繋がって生きている実感をもたらし、社会の中に自分の居場所を見つけることになる。そして、「子どもを健やかに育てる」という共通の課題を持った親が集い、一つのテーマによるワークショップにともに取り組むことによって、互いの「生きることの意味」を共有したり、共通の課題に取り組んだりする中で生まれる一体感やまとまりとしての凝集性が、地域の核となり、本来的な意味において家族と地域の協働を実現する基盤となると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① 木村直子、「子どものウェルビーイングを保障する新たな子ども家族支援の可能性―徳島県における家庭教育推進リーダー養成事業の展開を手がかりに―」、『鳴門教育大学研究紀要』、査読無、第 32 巻、2017、pp.215-225

② 木村直子、「子どものウェルビーイングをいかに保障するか」、『ひと・健康・未来』、査読無、9 号、2016、pp.14-16

③ 木村直子、「大学における地域子育て支援活動の役割と意義－大学内の子育て支援活動を展開する教育プログラムの実践から－」、『福祉のまちづくり研究』、査読有、第 16 巻、NO.3、2014、pp.21-32

④ 木村直子、「幼児のウェルビーイング概念操作化にむけての一考察－幼児がよりよく生活するために必要な力とはいかなるものか－」、『鳴門教育大学学校教育学会誌』、査読無、第 29 号、2014、pp.89-93

〔学会発表〕（計　5　件）

① 木村直子、「子どものウェルビーイングを保障する新たな子ども家族支援の可能性」、2017 年 2 月 3 日、平成 28 年度第 3 回四国５大学連携女性研究者研究交流発表会、グランドエクシブ・鳴門（徳島県鳴門市）

② 木村直子、「子どものウェルビーイングをいかに保障するのか」、2015 年 12 月 8 日、四国 5 大学連携女性研究者活躍推進シンポジウム、徳島大学（徳島県徳島市）

③ 木村直子、「子どものウェルビーイングをいかに保障するか」、2015 年 12 月 5 日、第 9 回ひと・健康・未来シンポジウム 2015 大阪、あべのハルカス（大阪府大阪市）

④ 川原亜津美・木村直子、「乳児は生活や遊びの場面でどのような力を獲得しているのか」、2014 年 11 月 29 日、日本乳幼児教育学会第 24 回大会、広島大学（広島県広島市）

⑤ 木村直子、「地域子育て支援活動を展開する教育プログラムの実践－鳴門教育大学赤ちゃんサロンの取組から－」、2014 年 4 月 27 日、子ども環境学第 10 回大会、京都工芸繊維大学（京都府京都市）

〔その他〕
報告書
① 木村直子、「発達に課題のある乳幼児とその家族を支えるハンドブック」、2018 年、全 19p.

② 木村直子、「家庭と地域の協働による　子どものウェルビーイング実現のための基盤形成に関する研究」、2018 年、全 45p.

６．研究組織
(1)研究代表者
木村　直子（Kimura, Naoko）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：80448349